

緑のセンターだより

公益財団法人 旭川市公園緑地協会 旭川市緑のセンター(相談所)

〒078-8327 旭川市神楽岡公園内 Tel 0166-65-5553 Fax 0166-65-5626

旭川市公園緑地協会ホームページ <http://www.asahikawa-park.or.jp>



No.190

発行:令和3年6月1日

鉢物や家庭菜園、花や木などで お悩みやお困り事はありませんか？

旭川市緑のセンターは、緊急事態宣言延長
により休館中ですが、お電話での相談は随時受
付中です。また、トイレはご利用いただけます。

講習会、展示会中止のお知らせ

単独講座

- 6月 6日 「庭木剪定とカイガラムシ防除講座」
- 6月19日 「ハーブで除菌スプレー作り」
- 6月20日 「フラワーハンギングバスケットづくり」
- 6月26日 「山野草講座」～寄せ植え作り～
- 6月27日 「立派なコチョウランをもらった時の講習会Ⅱ」



連続講座

- 6月 5日 「これから始める家庭菜園の初級講座」第2回
- 6月12日 「誰でも楽しめる美しい菊ガーデン講座」第2回

展示会

- 6月19日～21日 「ミニ盆栽展」

【休館日のお知らせ】

4月～10月は第2・4月曜日が休館日です。(祝日の場合は翌日)

11月～ 3月は毎週月曜日が休館日です。(")

〈園芸の基礎知識〉 植物の生き残るための争い

～ 枯れ滅びないために ～

植物は、自分の与えられた場所で、まわりの環境と戦いながら生きています。枯れないために必要なのは、「光を受ける力」「生育する場所を確保する力」「水や養分を吸収する力」です。

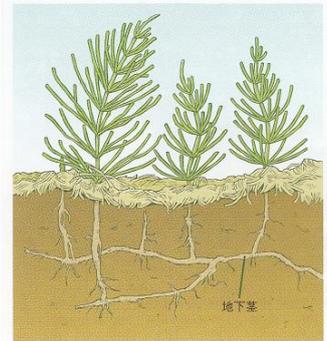
■「光」を手に入れる

どの植物も、光を求めて背丈を伸ばす性質があります。それは、より多くの光を得るためです。徒長とよばれる現象です。多くのタネが一緒に発芽した場合、隣り合う仲間と競い合うように、ヒョロヒョロと背丈を伸ばします。他の植物の葉っぱが自分の上に覆いかぶさるように茂り、自分が陰になると植物はその葉っぱを追い越すように背丈を高く伸ばそうとします。植物は背丈を伸ばして葉っぱを茂らすことにより、太陽の光を求めて競い合っているのです。

■「生育場所」を手に入れる

「根絶できない」といわれる雑草の一種のスギナは、湿った場所を好むシダ植物です。スギナの地上部は細い葉っぱで、小さいので除草できそうに思えますが、土の中に地下茎が長く深く伸びていて、根まで抜き取ることはできません。土の中にある地下茎のおかげで、夏の暑さにも耐えることができます。そのような根に支えられて、スギナは地上に生えているので、動物に地上部を食べられても、地下茎を食べ尽くされません。

スギナの根のイメージ



■「水」や「養分」を手に入れる

植物は水や養分を吸収するため多くの根を張り巡らしています。イネのような単子葉植物は多くのひげ根を、タンポポのような双子葉植物は1本の主根を伸ばしています。同じ場所で何年間も花を咲かせてきたタンポポは、根がニンジンのように太くゴボウのように長く伸ばしています。

(参考資料:SB ビジュアル新書「植物のすさまじい生存競争」ほか)

ちょっと楽しい講座のご紹介

緑の講習会「コキアでほうきを作ろう」から

コキア(別名:ホウキグサ)はヒユ科の一年生植物です。秋には真っ赤に紅葉する植物として親しまれています。講習会は令和3年1月9日(土)、10名の参加者を対象に、講師は当センターのフラワーマスターの植物管理職員です



コキアは、直根性なので、移植よりもタネの直まきがお勧めです。コキアの鉢植え栽培の場合、鉢の大きさは8～10号(直径24～30cm)に園芸用培土を入れ、タネを3～4粒まき、5mmほどの厚さの覆土をして水をたっぷり与えます。本葉が2枚

になったら間引きして1本にします。6～8月に1～2回緩効性肥料を与え、紅葉が終わって葉が茶色くカサカサに枯れるころに株元から切り取ってタネを振り落としてからほうき作りをします。

さて、コキアのほうき作りです。①刈り取ったコキアの枝を1週間ほど干します。②細かい枝をブラシまたは手(軍手をすると痛くない)ですいて落とします。③飛び出た枝を切り揃え、根元を麻ひもやタコ糸などでしっかりと束ねて持ち上げます。④麻ひもの上からお好みのリボンや太めのひもを巻いて仕上げます。



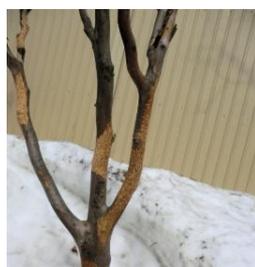
参加者は「明るい雰囲気、おしゃべりしながら楽しい講座でした。このほうき、家でも使います。」と嬉しそうに会場を跡にしました。

植物の病害

その61 「野ネズミ」



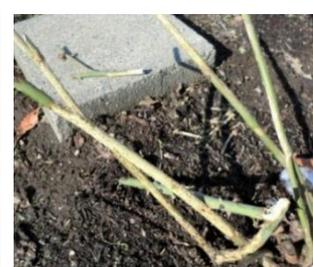
エゾヤチネズミ



ナツツバキの被害



エゾムラサキツツジの被害



バラの被害

1 食害されやすい植物

カラマツ、クロマツ、イチヨウ、ニセアカシア、ヤナギ類、ポプラ類、トチノキ、クリ、サトザクラ、ハウチワカエデ、ヤマグワ、ナナカマド、タラノキ等です。(嫌いな樹種は、アカエゾマツ、グイマツ、イチイ、サウグルミ、ホオノキ、シラカバ、ハンノキ類、イヌエンジュ)等です。

2 被害

北海道での野ネズミ被害は、そのほとんどがエゾヤチネズミによるものです。野ネズミは、まず樹木の外側の樹皮をかじり落としてから、木に張りつくようにして内側の樹皮をそぎ取って食べます。食べているのは形成層を含む細胞層で、内樹皮と呼ばれる植物の生きている細胞組織です。外側の樹皮や材部は死んだ細胞の集まりですから、普通それらは食べられることはありません。外樹皮は剥ぎ落とされるばかりで、材部が露出すると、そこでかじるのは止まります。この内樹皮をぐるっと一周かじられるとその木は枯れてしまいます。

3 生態

野ネズミは人の生活圏内には暮らしていないネズミの総称で、野ネズミの種類としては、ハツカネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、ハタネズミ、スミスネズミ、エゾヤチネズミなどです。

エゾヤチネズミは北海道一帯に生息するネズミで、草原やハイマツ林等の環境を好み、落葉層の厚いところを好みます。頭胴長は約10～14cm、尾長は4～6cmほど、体重は27～50g程度と比較的小さいネズミです。繁殖期は北海道の中央部では主に春と秋です。繁殖期間は18～19日、胎児数は1～11頭で平均5.3頭を産みます。

基本的には草食で、秋～春にかけては樹皮や種子を食べ、夏にはほかの植物(昆虫等)を食べます。

野ネズミの平均寿命は3～4カ月と短いです。これは、外敵(キツネ、イタチ、テン、ネコ、フクロウ、ヘビ)の多さが関係しています。

4 防除法

- ① 野ネズミが隠れる場所をなくします(無駄な雑草は刈り取る)。
- ② 粘着シート、殺鼠剤(手撒き用リン化亜鉛、野鼠用)を使用します。
- ③ 大切な樹木は秋～春にかけて樹木に金網を巻きます。

(参考資料 森林保護部 田中 圭亮氏)



ミニバラを楽しむ



母の日は一大イベントの一つなので忘れることはありませんが、父の日は？という「いつだったっけ？ 終わっちゃった？ まっぴいかに～」なんてことが…。6月の第3日曜日を確認して、あらかじめ印をつけておきましょう。

母の日のプレゼントはカーネーションが定番です。父の日には？…6月の花というとアジサイやバラですが、近年はバラが定番になってきたようです。プレゼント…いいかもしれません。

……………失敗しない管理のコツ……………

- 1 栽培環境・日当たり・置き場……肥よくて水はけがよければ、土質は特に選びませんが、生育期はなるべく日当たりと風通しのよい場所で栽培します。特に室内のように風通しが悪い場所では、うどんこ病が発生しやすくなりますので、注意が必要です。
- 2 水やり……鉢植えは、年間を通して鉢土の表面が乾いてから、鉢底から流れ出るまでたっぷりと与えます。(庭植えにする場合は、真夏などに雨が少なく乾燥する場合のみ、たっぷりと与えます。)
- 3 肥料……春から秋の生育期には、花を何度も上げてくるので不足する栄養を補うため、液体肥料や発酵油カスの固形肥料などの置き肥を定期的に施します。冬は休眠期なので肥料は与えません。
- 4 用土(鉢植え)……水はけがよく、有機質に富んだ土が適します。市販のバラ専用用土を用いても良いでしょう。植え替える場合は2～3年に一度、休眠期の3月上・中旬が適期です。
- 5 花が終わったら……5月の咲き始めから花が終わるたびに花ガラ摘みを随時、繰り返します。その後、開花枝は伸びた枝の1/3を目安に切り戻すと、新たに花枝が伸びだして2番花・3番花を楽しむことができます。新梢(シュート)が出てきたら、なるべく早めにピンチ(枝先を摘む)すると樹形が整いやすくなります。冬の剪定は11月行います。シュートが出ている場合は古い枝を切り取り、新しい枝に切り替えます。
- 6 注意する病気(黒星病、うどんこ病)と害虫(アブラムシ、チュウレンジハバチ、カミキリムシ、ハダニ)……バラの病気や害虫に効果的な混合薬が市販されているので準備しておくといいでしょう。

展示室の植物 (96)

セラセニア 学名:Sarracenia L. セラセニア科 セラセニア属

カエルの合唱団のように口を広げて競い合っているように見えるのはセラセニアの一種で、食虫植物です。草丈が1mに伸びるものや15cmほどと低い種類のものもありますが、この筒状の葉を落とし穴として使って虫を捕まえます。袋の中の液体に昆虫が落ちると溺れて死に、分解吸収される仕組みです。また、春から初夏に咲く円形袋状の花も特徴的で、昆虫が内部に入り込むと、出るときは花びらの隙間から出なければならぬ特殊な構造になっていて、その時に必ず受粉して種を残し、世代を繋いで行く仕組みになっています。

